

『源氏物語』が語るもの

——宗祇『雨夜談抄』が開拓する「読み」とその意義——

ノット・ジェフリー

一 はじめに——宗祇と室町期源氏学系譜——

『雨夜談抄』は連歌師・宗祇の数少ない『源氏物語』注釈書の一つで、その内容は『帚木別注』との異名の通り、『源氏物語』「帚木」一巻のみを対象とする。室町期源氏学を代表するいわゆる「主流」注釈者の系譜上、宗祇は、師の一条兼良、弟子の三条西実隆などと違って『源氏物語』五十四帖にわたる注釈書を残していない。また、『源氏物語』本文から順に引用し、項目を立て、注記を施すといったオーソドックスな手法に従った宗祇の注釈書としては、『雨夜談抄』以外にはその存在が確認できない。

『源氏物語』の研究史上数々の功績を上げた宗祇の注釈として、また「草子地」という術語の初出例がみられることで、ある程度の知名度を得た『雨夜談抄』ではあるが、これまでの研究では、主に中世源氏学における宗祇の位置づけにこだわってそこに止まり、特色ある宗祇の著作の分析自体がさほど進まないまま今日に至っている。本稿では、その影響力が十分に重要視されてこなかったとおぼしい宗祇源氏学の本質に迫る試みの一環として、『雨夜談抄』の注記内容を検討し、宗祇が開拓した『源氏物語』の「読み」を明らかにする手がかりとしたい。

二 宗祇一卷注『雨夜談抄』——成立とその背景——

まずは、『雨夜談抄』の成立に関して確認しておく。

文明十七（一四八五）のとし文月のはしめつかた児女子のために注し侍り さためてひか事おほく侍らむかし

宗祇在判

〔『雨夜談抄』 六二八〕^①

晴、向徳大寺（実淳）、宗祇法師令誘引之、今日帚木卷講之、右府・大納言入道（飛鳥井）榮雅・下官（実隆）・姉小路（基綱）・小倉・真乘院僧正・師富朝臣等聞書「之」、講席了被勸一盞

〔『実隆公記』 文明十七年六月廿三日条〕^②

抑今朝宗祇携帚木卷抄出新作一帖来 一見有興

（同十七年七月七日条）

『雨夜談抄』の成立事情はある意味ではつきりしている。宗祇自筆本は伝わらないようであるが、現時点で報告されている写本二十数点のうち、ほとんどはこの自跋を附載する。なお、跋の内容に関しては、伊井春樹氏の詳しい考察がある^③。成立時期について、『実隆公記』の記録と一致することが判明し、またその記録者・三条西実隆の宗祇との関係から考えても、その信憑性かなり高いと思われる。作成した背景に関しては同じ『実隆公記』によれば、完成した『雨夜談抄』が実隆邸に持参されたとされる日より少し前に、宗祇が徳大寺実淳邸にまるで招聘講師のよ

うに招かれ、当時の公家文壇の中心人物を相手に「帚木」巻の講釈を行ったことが確認できる。大変評判だったようでその場で貴顕数人も聞書したと見え、そして伊井氏の推測に従えば、その後（依頼を受けてか）宗祇がわずかに二週間足らずで今の『雨夜談抄』の原本を執筆したことになる。

なお、文明十七年の嚴選された会衆からも窺える通り、この講釈はうちつけの即興というより、むしろかねがね噂となっていた宗祇の源氏論を識者に聞いてもらうために設けられたという印象を受けよう。その裏付けとして、伊井氏が指摘されたように、八年遡って応仁文明の乱の終結より少し前、『実隆公記』の記録に宗祇がその当時新造の種玉庵で「帚木」巻の講釈を行い、実隆もそれに出向していることが確認されるのである。

晴、早旦於宗祇草庵有源氏第二卷講尺

（『実隆公記』 文明九年七月十一日条）

晴、今朝又有源氏講尺

（翌十二日条）

ここで強調しておきたいのは宗祇が早くから「帚木」巻においた価値である。『雨夜談抄』は、同時代の注釈に比べて一見残片とも見えるが、『実隆公記』より窺える宗祇の「帚木」重視の姿勢から、宗祇の『源氏物語』に対する「読み」そのものに直接触れうる、重要な資料と理解されよう。

三 『雨夜談抄』の性格——稲賀氏「傍流」説の再検討——

『雨夜談抄』を取り上げた先行研究は意外と少ない。また、それらの中では宗祇と一条兼良との関係に着目して、『雨夜談抄』と『花鳥余情』とを対比する視点からの分析が多いものの、両書の注記内容を比較した詳細な検討はまだ見られない。ここでは、『雨夜談抄』の研究をもつとも進展させたとみられる稲賀敬二氏の説を取りあげ、その修正を図ることによって『雨夜談抄』の新しい捉え方への路線を切り開くこととする^④。

稲賀氏は次のような例から出発する。雨夜の品定めの一節で、馬頭が女性論を進める中で、

(良家生まれでも平凡な娘)もとのしな時世のおほえうちあひやむことなきあたりのうちくのもてなしけはひをく
れたらむはさらにもいはすなにしてかくおひいてけむといふかひなくおほゆへし

(帚木 四〇。『源氏物語大成 校異篇』による)^⑤

▼第三段馬頭か詞也もとのしなたかき人の時よのおほえならふかたなき人をいふ鬼にかなさいはうといふかこときなり
(次項)うちくのもてなしけはひのすくれたること也もとよりかくこそあるへき事にてあれといふ心なり

(『花鳥余情』二二四)^⑥

▼これには女三宮あたれり 朱雀院のみこにて六条院の本台におはしけれと手などもあしく心もをくれ給へりし也

※けれとも↓けれと陽^⑦ (『雨夜談抄』六二二)

兼良と宗祇の根本的な姿勢の違いについて、まずおさえておく。兼良は雨夜の品定めを十八段に分け、話者の交代とほとんど一致する各段の変わり目を「第三段也馬頭か詞也」などというふうに表示している。一方、宗祇の場合は、

たとえば「これには女三宮あたり」などという注記により、品定め過程で次々と話に出てくる個々の女性たちを後に登場してくる作中人物に比定するアプローチを貫いている。

稲賀氏の考察によれば、それぞれ個性的とみえる兼良と宗祇の両説であるが、いずれもそれ以前の源氏学に遡れるものであり、しかも鎌倉期に作成された「七毫源氏」の「帚木」巻の書入注のなかに、両説は実際共存していたことも判明した。稲賀氏は、『河海抄』など「主流」の注釈がある一方で、このように書入注などから発見される説を源氏学の「傍流」と呼んでいる。また注釈史上、『河海抄』から『花鳥余情』への間に起きた「飛躍」とも映るほどの変化は実際、「傍流」の説がいろいろ「主流」へと流れる現象に起因したと説明している。そして兼良と宗祇のこの食い違いに関しても、一時は隣り合った「十八段区分説」と「人物比定説」がそれぞれ『花鳥余情』と『雨夜談抄』に継承されたと見えることから、氏は十四世紀の源氏学が一方では兼良へ、一方では宗祇へとそれぞれ流れたというように、新しい源氏学変遷史観を提示した。この説は、定説とまで言わずとも、今にいたるまで否定はされていないと認識している。

但し筆者は、稲賀氏の「主流」「傍流」説には疑問がある。氏の論証自体は見事であり、頷けるところも多いが、注釈史・注釈書への具体的な適用においては難しい点があるように思う。宗祇説と兼良説とを実際比較してみると、同じ根源からの枝分かれというより、むしろ『雨夜談抄』が『花鳥余情』を直接編集していると感じられるところが多い。たとえば次のような注記の例をみてみよう。

(馬頭が突然登場して会話の主導権を握る) なるのほれともとよりさるへきすちなぬは世人のおもへることもさはいへとなをことなり

▼…むまのかみ藤式部丞と御物忌にこもらんとてまいりたるを中将この人にゆつりてさためさせ侍るにむまのかみ物よくいふ人なりければやかてうけとりて申侍り…

(『花鳥余情』 二四)

▼…左の馬のかみまいりあへるか物よくいふ人の世中の人のありさまされる人なれば中将左の馬頭にゆつりいはせらるゝなり…

(『雨夜談抄』 六二〇)

ここでは光源氏の質問に対して答えかけた頭中将が、突然登場する馬頭に会話(女性論)の主導権を譲る、極めて重要な場面展開がある。これらの注記の着目すべき点は、兼良と宗祇との類似にある。語句・順番の差、藤式部丞の出入りなどの違いは指摘されようが、①馬頭が「(兼良) まいりたる／(宗祇) まいりあへる」ところ、②「物よくいふ人」なので、③「頭中将」が「この人／左の馬頭」に「ゆつり」、④「さためさせ侍る／いはせらるゝ」という一連の展開は類似度が高く、宗祇が先行する『花鳥余情』を参照しなかつた蓋然性は低いと思われる。

『雨夜談抄』の注記を探せば、『花鳥余情』に由来すると見える注記が他に何例も見いだせる。ここで、もう一例にも注目してみる。ここは品定めの中で、馬頭が女性の嫉妬を話題に、その加減の理想について語る部分である。

(馬頭によると、全く嫉妬しないと却って薄情とされる) あまりむけにうちゆるへみはなちたるも心やすくらうたきやうなれとをのつからかろきかたにそおほえ侍かし

(帚木 四六)

▼ ゑんすへき事をもうらみすうちはなつやうなるはたうさはらうたきやうなれとまことに男を大事と思はぬに
にたれは中／＼かろきかたにおほゆると也…

(『花鳥余情』 二二七)

▼ これ又女の物えんしもせずおとこの心にまかせたらんはおとこをおもはぬにてこゝろかろきかたにそおほえ
侍といへるなり…

(『雨夜談抄』 六二六)

女性の男を①「うらみす／物えんしもせず」②「うちはなつやうなる／心にまかせたらん」ことは、③「男を大
事と思はぬにたれは／おとこをおもはぬにて」④「中／＼かろきかたに／こゝろかろきかたにそ」⑤「おほゆる
と也／おほえ侍といへるなり」という具合に、語句を一つ一つに分けてしまふとその関連が見えにくい、全体と
して検討した時その重なりはやはり否定しがたい。

ほかにも例がみられるこういう類似を確認すると、稲賀氏の「傍流」説がその限界に突き当たるように感じる。「人
物比定」や「十八段区分」など独立性の高い説の場合、それぞれの注釈での有り無しは即断できようが、それぞれ
の注釈の性格はその有り無しで理解できそうなケースがやはり少ないように思われる。例えば兼良と宗祇との「差」
がはっきりみられる次の例でも、同じことがいえるだろう。

(引歌)とあれはかゝりあふさぎるさにて…

▼…本の荷にことつけそへる荷をいふ…人のあつらへものなとあつまりてあなたこなたへとするはおのか身のわつらひになる心なり…

〔『花鳥余情』 二五〕

▼…此こゝろそへには我心に物をりやうけ(領解)したるこゝろなり さやうにしてよからんとおもへはちかふ さらはまたかやうにやせんとすれば又たかふ事ある儀なり あふささるさとは行さま来るさまのやうの事なり 只こなたかなた物のちかふ世のならひなり…

※そへには↓そへには陽 〔『雨夜談抄』 六二二〕

○そへにととすればかゝりかくすればあな言ひしらずあふささるさに

〔『古今集』 卷第十九 雑体 一〇六〇 よみ人しらず〕^⑧

ここは馬頭の話の総括で、存在もしない理想(の女性)を追いかけるところのむなしさを伝えるところである。稲賀氏が焦点にあげた「十八段区分説」ほどのすっきりした対立関係はないが、『雨夜談抄』のこの注記で兼良説が宗祇に完全に無視され、否定されていることは認めざるを得ないだろう。「あなたこなた／こなたかなた」の対応は偶然の域を出なからうが、やはりここでも『花鳥余情』が意識された上で、その説が捨てられていよう。

『雨夜談抄』と『花鳥余情』との関係においては、「主流」「傍流」で形容されうる系統の対立よりも、いわゆる「傍流」からそれぞれに「十八段区分」または「人物比定」という方法を選ばせた、根本的に作品と向き合う姿勢の違いが

注目されよう。宗祇が師・兼良の『源氏物語』の捉え方を熟知しながらもそのまま受け継がないというスタンスがくつきりと見てとれる。稲賀氏の「傍流」説では、『雨夜談抄』の性格が浮かび上がってこない。原点に戻って、宗祇が兼良説を受け継がない理由から考えなおす必要がある。

四、「かくかけるにこころあり」——宗祇の「読み」に迫る——

『雨夜談抄』の冒頭部分、つまり「帚木」巻の書き出しに対する注記項目の中には、とても興味深い部分が発見される。

此巻を帚木と名つくる事は…うつせみのつれなくしてあひたてまつらすなりしかはは、き木の心をしらてその原の道にあやなくまとひつるかなと読給ひしに女ふせやにおふる名のうさにあるにもあらずなど返しにたてまつりし歌にてつけたる名なり 坂上是則かその原やふせやにおふるは、き木のありとはみえてあはぬ君かなといへる歌をとれる歌なり… ①此巻の名なれとも此物語五十四帖にをよほす名也 其故は②此物語はつくり事

にてなき事にはあれとも又昔ありこし事ともおもかけにしてかけるなり…されは五十四帖はことくあるものかとみればなくなき物かとすれはある物なれば ③此は、き木一部の名になる物なり…たとへは莊子か夢に胡蝶となりしらす又胡蝶か莊子となるかといふかことし… ④此物語はいにしへの夢そともいひかたく此世にあるわれ人の今の身のうつ、ともさためかたくとも夢のわたりのうきはしは、き木のありなしなり…

(六一五)

当の引用本文の語句解釈についてはまったく急がないという姿勢を示すように、宗祇の『源氏物語』総説といえ

る論旨がここでゆつくりと展開されていく。その長さと言い、その視野の広さと言い、他の古注・旧注においてあまりその類を見ない。宗祇が意を尽くしてしたためたこの文章を読んでいくうちに、この一介の連歌師がなぜ、一世を風靡して内裏にも献上されたばかりの師・兼良の『花鳥余情』に対抗しなければならなかったか、その理由が見えてくると考えられるのではないか。

①「此巻の名なれとも此物語五十四帖にをよほす名也」とはどういう意味だろうか。一旦保留にして以下の説明と考え合わせる必要がある。②「此物語はつくり事にてなき事にはあれとも又昔ありこし事ともをおもかけにしてかけるなり」がヒントになる。ここで宗祇は長編『源氏物語』五十四帖、一部全部が統一した性格を持つ、という考え方を提示する。③でその性格が莊子の夢の謎のごとく曖昧なもので、また巻名の由来となる『古今集』の是則歌に見える「帚木」とびったり同質ゆえ、宗祇が『源氏物語』に見出しているこの「統一した性格」が確たるものだったと確認されよう。最後に④「此物語はいにしへの夢そともいひかたく此世にあるわれ人の今の身のうつ、ともさためかたくとも夢のわたりのうきはしは、き木のありなしなり…」からみて「帚木」のみならず、「夢のうきはし」も作品全体を形容する比喩として間に合うらしい。「此巻の名なれとも此物語五十四帖にをよほす名也」という発言で宗祇が言わんとしたのは、『源氏物語』が帚木のように胡蝶の夢のように「さためかたく」ありながら「つくり物」として、「五十四帖」がそろってその一つの性格を共有する「一部」になる、という理解ではなからうか。

この「一部」の理解によるならば、『花鳥余情』が採る「十八段区分説」は当然「人物比定説」におとる。作られた、共通な性格を持つ「源氏一部」として考える宗祇なら、雨夜の品定めという、筆を尽くして長大となった場面であるだけに、紫式部がそれなりにあとの作品での効用を企てたと考えるのも自然であろう。以上の『雨夜談抄』冒頭部分の続きの一節がこの解釈を裏付けるように思う。それを次に引用する。

(光源氏が地の文で交野の少将と比較される所) ……されは①むらさきしきふの筆の跡その色ふかくその心はかりなき物なり さて此卷のはしめに光源氏といふよりかた野の少将にはわらはれたまひけんかしといふまでは②ものかたりの作者のこと葉也 これのみならず③紫式部のこと葉とところ／＼おほかるへし…

(六一五～六一六)

稻賀氏がいままで論証した通り、『雨夜談抄』が「草子地」の初出例であっても、作者(語り手)の言葉が周りの地の文から判別できるところもある、と初めて気が付いたのは宗祇では決してなく、これもやはり鎌倉に遡る、いわゆる「傍流」の注釈の一つになる。ただし、宗祇の独創によるものでなくても、『雨夜談抄』の性格を定める上で宗祇の源氏観全体の一部分としてとらえる必要がある。①「むらさきしきふの筆の跡その色ふかくその心はかりなき物なり」が以上の引用部分の「帚木」のはかりがたいところと響き合って、またその言い尽くせない性格も一緒にすると認められよう。②「ものかたりの作者のこと葉也」と③「紫式部のこと葉とところ／＼おほかるへし」で指すのはいわゆる「草子地」のことで、その「ところ／＼おほかるへき」特徴も、ある意図した性格が長編全体にわたる、という源氏観とも一致しよう。もちろん、作者の存在に着目する「読み」と、作品に貫く原理を見出す「読み」とは本来別のものであるが、その二説の宗祇『雨夜談抄』における合体によって、『花鳥余情』と性格を根本的に異にする「読み」が生まれたという見解である。

この「草子地」の最古の使用例が確認されることで知られる『雨夜談抄』なので、これまでは語り手の存在に気づき、注意を払ったことで評されることが多かったが、次に引用する注記本文からもわかるように、「語り手」自体が

特別視されたのではなく、むしろその発見は宗祇の語句一つ一つを重視した業績の一例にすぎない。

(巻の場面設定) また中将などにもし給しときは…

(帚木 三五)

源氏の君此巻にて十六歳官は中将なり 紅葉賀の巻に宰相にて中将もとのことし 花のえんまては中将なり
しかれば此巻までは①勿論中将なるをまた中将などにもし給し時とかける事不審あるへき事也 しかはあれ
と②かくかけるにこゝろあり その故は③紫式部此物語をかく事わかつくりたるものやうになさずして昔あ
りし事ともをさまゝにつたへき、し事をかきうつしなとしてとりあつめ一部にしたるやうにかけり…むかし
の事にいへるものなれば中将などに物し給ひしの過去のしうたかひなきものなり…此儀を分別すれば不審なき
物也

※たまゝ↓さまゝ陽 (『雨夜談抄』六一六)

ここは本当に何気ない語句の使い方に対する注記であり、「帚木」の書き出しに続く部分で、いかにもついでにと
いうふうにして光源氏の官職に言及するところである。

問題は「まだ」という「帚木」巻本文の単語にある。「帚木」巻の現時点で中将で、大部その先までも中将のまま
続くので、宗祇が①で「まだ」の使い方「不審」を覚える。またこの「不審」の向け方には宗祇流の「読み」の
性格が窺える。有職故実に関する注記項目が従来 of 古注釈では多い中で、宗祇はここで前例などを顧みずに、紫式
部の書き方にその答えを求めると。もし「まだ」や過去の「し」などで光源氏周辺にいた人物が回想する様であるな

らば、まさにそのようにあえて書いた、と大胆にも結論を出す。③「紫式部此物語をかく事わかつくりたるものやうになさずして」という注記を稲賀氏が指摘された通り「傍流」から拾ったにしても、それは宗祇の上述のような感覚によつた選択と見てよからう。

「帚木一部説」で『源氏物語』という作品各所にその全体を統一する首尾一貫した「何か」がある。そういう立場と呼応して、それぞれの細部までが同じ統一に参加するとみて、必ずそこに②「かくかけるにこゝろあり」ということを前提にして宗祇は読み進めるようである。各所に「こゝろ」があつて、またそれは作者が「かくかける」ことだからそこに仕込まれていて、そして各所にあるだろうその意味を読者が「分別」しなければならない、という手続きに『雨夜談抄』の源氏観が凝縮していよう。

「鑑賞的」「文意把握中心」などとよく形容される『花鳥余情』ではあるが、そういった評語は『河海抄』などの相對距離を表すに際しては有用であつても、『花鳥余情』そのものの性格、また『雨夜談抄』の性格を見定めるには曖昧すぎる弊がある。たとえば、次のような比較によつてその点を確認してみよう。

(頭中将の女性論) 女のこれはしもとなんつくましきはかたくもあるかなとやう・なむみ給へしる…

(帚木 二七)

▼下は源氏と中将との問答に四段あるへし第一段中将の詞也

(『花鳥余情』 二二一～二三)

▼…これより品さため也此しなさための事は世間の女の心をおほく見あつめたる人か源氏の君にあひたてまつりて世にはかゝる心ある女もありとある心ある女もありといふをかたり奉る事なり…おほかた此卷は心得か

たきにや侍らん たとへは当時もとし老たる人は五十年六十年の間のことをいふとてはその人の心はかくこそありしかさやうにこそ侍りしかといふかこときの事なりそれに当時の人の心こしかたの人の心に似たるかあるかことし このことはりにもとつけはわつらひなくこゝろえらるゝ物也

※いひあつめ↓見あつめ陽 といふ↓とある心ある女もありといふ陽

(『雨夜談抄』 六一九)

光源氏と頭中将の会話を仏教的問答に見立てる『花鳥余情』の構造論は間違いなく宗祇のこの説明と異なる鑑賞態度をみせるが、両方とも鑑賞中心であることには変わりがない。また兼良の文章は簡潔なものであるが、宗祇の饒舌に比べその説明が確かに「把握しやすく」組まれている。注釈者としての兼良と宗祇とを比較した際、『源氏物語』への態度よりも『源氏物語』の読者への態度が峻別しやすいためである。上に挙げた数例でも分かるように『花鳥余情』は読者への説明に重点を置く¹と見える一方、『雨夜談抄』の方は読者を解釈へと導くように、かなりの文字数を費やしている。宗祇が品定めで採用した「人物比定説」においても、厳密に言えば情報開示より解釈方法・読み方を教える面が強かった。この例も同様で、読者・人間単位での読み方が簡単なようでも、結局「当時の人の心こしかたの人の心に似たるかあるかことし」ということで、読者に対して常に自分で考えることを強いることにもなる。

「宗祇流」として知られる資料は『雨夜談抄』を大きく出ないが、直弟子の実隆の『細流抄』の注記傾向にはその面影を忍ばせるものがある。次に引用してみる。

(馬頭の話を書いて頭中将が)のりの師の世のことほりととき、かせむ所の心ちするも……

▼『花鳥余情』が同じ箇所、「のりの師」に触発され、『法華経』のとある原理を見出すのに対して)：花鳥三周説法の事尤おもしろし摠して此しなされたは①口にていふまでにては無曲也 ②久しく年へたる人などはさまざまに思あはする事あるへし悉皆世のありさま人々のうへにあるありさま也此物語をみるには源氏の時代になりかへりてみるべき也③今の世にあはせてみれば毎事虚誕のやうにおほゆる也 定家卿恋の哥よまんには凡骨をすて、業平のおきもせずねもせて夜をあかしてはとよみし時の心に成かへりてよめと申されしことく④此時代に心ををきてみるべきと也

〔細流抄〕 一二二

ここにいう「三周説法」の詳細は割愛するが、兼良は品定め以前の頭中将と源氏の雑談をわざわざ四段の間答に組み立てたのと響きあうかのように、ここで肝心の品定めを仏教的な原理になぞらえた。『花鳥余情』の中でかなり目立つその長さから兼良がそれなりに重視した箇所と理解されるが、宗祇はそれを完全に無視し、対抗する注記項目も立てない。もちろん、『花鳥余情』にはわずか一回しか言及しない、そして一回も批判しない『雨夜談抄』に対してはその説明を求められないが、ここで実隆が代弁しているように思う。①「口にていふまでにては無曲也」と言つて品定めそのものを過大視しない宗祇の姿勢を受け継いで、そして②で物語の読者に視点を戻す。「年へたる人などはさまざまに思あはする事あるへし」と言つて、宗祇の「とし老たる人は五十年六十年の間のことをいふとて」をそのまま継承し、向き合う本と読者以外の道しるべの必要性を柔らかに否定する。③「今の世にあはせてみれば毎事虚誕のやうにおほゆる也」と言つて作り物語本意の読み方を促す。「今の世」から時空外の物を仰いで大げさに読むことをせずに、作者も時代も特定された、限定だらけの物語認識を持たせようとする。そして最後に、宗祇流が

計る語り手・読み手の相対化が実現できるよう、④「此時代に心をきてみるべきと也」と言つて読み進む読者の自己意識を掻き立てる。「源氏の時代」が見えてくるかこないかは、「心」の持ちよう次第とする。

五、まとめと課題——江戸以降の源氏観とのつながり——

『雨夜談抄』で、弟子とまで言わずとも、間違ひなく一条兼良に師事した宗祇は、このように直接言及を避けながらそれでもはつきりと『花鳥余情』を批判的に、また選択的に継承したと認められよう。その反面、一見して宗祇が『花鳥余情』に果敢に挑んだと思わせる言動を取っているという史実はまったく伝わらない。むしろ『花鳥余情』の抄出本まで残している^⑩。『細流抄』においても、宗祇と違つて真正面から批判する実隆の、もっぱら『河海抄』『花鳥余情』を標的にする態度がかえつてその格上げに貢献すらしたと考えられる。子孫の三条西家流の注釈書では『花鳥余情』の影が薄れるどころか、時代が下れば下る程濃くなつていくといった趣もある。現在からみれば『細流抄』こそが陰に落とされたとさえ感じられよう。但し、こういう状況下で、『雨夜談抄』、延いては『細流抄』などが伝える宗祇流の影響が去つてしまったのかというと、それでもなさそうにみえる。

あつまをもち／＼のうつは物のうへにをき紫をよろつ色の中にたとふるかことしみなもとふかき水はくめともさらにつくる事なくくらくなき玉はみかけはいよ／＼光をます我國の至宝は源氏の物語にすきたるはなかるへし

〔『花鳥余情』 九〕

これは『花鳥余情』序からで、まずは比喩をもつて、次に率直に『源氏物語』の「至宝」たるを説く、或は讃える、

かなり有名な冒頭部分の一節である。ここまでとらえてきた宗祇とははつきり違う源氏観を披露している。貴ぶにしても汲むにしても磨くにしても、または（もっと具体的に）小分けして段をつけて問答に組み立て直すにしても、または仏教・儒教の原理を見出すにしても、兼良の『源氏物語』はいささか不動の印象を与えよう。

一方、宗祇の『雨夜談抄』にみえる「読み」はどうか。

此物語はつくり事にてなき事にはあれとも又昔ありこし事ともをおもかけにしてかけるなり…此物語に上中下の人々もろくの行跡みな夢のうちのはふれなり…むらさきしきふの筆の跡その色ふかくその心はかりなき物なり

（『雨夜談抄』六一五）

『源氏物語』を「我国の至宝」とまで記す兼良の源氏観と宗祇のそれとは、必ずしも相いれないわけではないだろうし、宗祇自身の中に兼良の源氏観が共存していたということもありえたようである。とはいえ、作品の「一部」を貫いて各所に作者がしかけ、「はかりなき」とも評されるその「心」を探究しようとする宗祇流の注釈書が想定している読者というものは、『花鳥余情』が想定している読者像とは根本的に異なると考えられる。宗祇のように「つくり事」という認識に立った上で試みられる「読み」の営みは、「宝物」の閲覧とはおのずと異なるものになるだろう。もちろん、『花鳥余情』にしても『雨夜談抄』にしても、それぞれ注釈書としての中身は一樣ではないわけだが、いずれにしても、『雨夜談抄』の個性と宗祇の源氏観は、宗祇による年立が後には徐々に兼良のそれにとって代わったように、確実に後代へとつながってゆく面をもっていたとみえる。

たとえば、『細流抄』においては宗祇の源氏観がどう反映されているか。次の例で確認してみよう。

(巻末の注記で、「…とそ」で終わる「帚木」巻の結び方について)とそとは紫式部か我かきたる事をみせしのため也此物語好色をもていふやうなれとも人の心もちぬをしへ何れの書にもかやうなるはあるましき也こゝろをよくつけて見侍へき事と云々

※せし↓みせし九^① 『細流抄』 三五

この注記ははつきりと宗祇の「語る」『源氏物語』を引いている。のみならずそれを発展させる。言わんとすることは多少分かりづらい注記だが、解釈が難しいところ(例：光源氏の好色ぶり)にもそれなりの「心」が必ずあるという前提においても、そして(『河海抄』や『花鳥余情』が必要とする漢籍・有職故実の知識とは別に)「こゝろをよくつけて」読んでいけば物語が語ろうとすることに必ず至るというスタンスにおいても、宗祇を継承していよう。「云々」とあるのも案外宗祇の直伝を指すかもしれないが、定かでない。

なお、注釈が大量に生産される戦国時代を経て江戸時代になると、影響関係の判別はさらに難しくなるが、次の例に注目してみたい。

又つねに供御の後には御机にかゝらせ給ひ、明くれ源氏を御覧じけり。この物語ほどおもしろき事はなし。六十餘年見れどもあかず。是を見れば延喜の御代にすむ心ちすると、不斷仰せられし。或時紹巴法橋まゐりてなにを御覧なさるゝと申されければ源氏、又めづらしき歌書はなにか待ると問はれしかば源氏、又誰が参りて御閑居をなくさめ申すぞと申されければ源氏、と三度までおなじ御返答有りし。

ここに松永貞徳が思い描く、源氏注釈『孟津抄』の作者でもあるその師・九条種通の源氏観に宗祇流の面影を見いだせないだろうか。傍線部の「延喜の御代にすむ心ちする」とは準拠説を引きながら、やはり実隆のいう「此物語をみるには源氏の時代になりかへりてみるへき也」を連想させる。また、研究対象というより読書という向き合
い方にも宗祇流に近いところがあるろう。もちろん宗祇という個人にこだわらる必要もない。

さらにもう一人、本居宣長がいる。

…歌はそのをしへの方にはさらにあづからず、物のあはれをむねとして、(政と)すぢ異なる道なれば、いかにもあれ、其事のよきあしきをばうちすて、とかくいふべきにあらず。…たゞ其よみいづる歌のあはれなるをいみじき物にはする也。すべて物語文なども、みな此心をもて、よくよくあぢはひて、そのむねとする心ばへをしるべし。さればこの事は、源氏の物語につきて卷々の詞をひき、譬をあげて、別にくはしくいひおければ、あはせ見てかむがえてよ。大かた此歌のみちの心ばへは、かの物語のうへにてしらるべきことぞ。

『石上私淑言』 二七二～二七三 ⑬

ここは歌学の話であるが、宣長の源氏観もその合間にみえていよう。ここにいう「味わう」読み方を宗祇流に似た原典回帰への傾倒として考えてみる。ここにみえる、歌も物語もそれがそれとして味わわれれば足りる、といった期待は『雨夜談抄』にみえた「かくかけるにこゝろあり」と大きく離れない文学観の所産にならう。しかも、こ

のように「あはれ」の表出を「むねとする心ばへ」を目当てに読む読者ならば、宗祇流の主題説・作品概念を受け入れる準備をすでに整えていよう。

*

総じていえば『雨夜談抄』は、源氏学変遷史の有用な指標というより、『源氏物語』の「読み」の変革を伝える資料としての意義があろう。中世末期において「至宝」とまで貴ばれるようになっていた『源氏物語』に対し、読者と向き合いながら「作り物語」の「読み」を深める方向へと舵をきったのが『雨夜談抄』であるといえる。もちろんこの静かな飛躍は一日にして、また一人によって成し遂げられたものではないし、宗祇固有の独創に始終するとも思えず宗祇にのみこだわる必要もない。しかし、その原動力となった新しい源氏「読み」を開拓した一人としてはその役割がもつと重要視されてよいと思われる。

また、この源氏観が確立されてからも、それまでの『源氏物語』享受者の蓄積を覆す革命は起こらず、いわゆる「傍流」から「主流」への下剋上にもいたらなかった。とはいえ、「我国の至宝」並みの権威が健在ながらも、やはり三条西実隆、九条種通、本居宣長などなどの読み方には、『花鳥余情』よりも『雨夜談抄』の方法に近い部分もあるようには感じられよう。喩えとして若干簡単すぎるが、知識を武器にその意味を発掘できる『源氏物語』から、常々耳を凝らしているとその語る声が聞こえてくるといった『源氏物語』への「読み」の変革を示す。そして、徐々にこの方に傾くとみえる江戸以降の読み方について、とりわけ「語る」作品としての新しい認識を解明するには、『雨夜談抄』など宗祇注が恰好の糸口となるろう。

【注】

- ①中野幸一編『明星抄 種玉編次抄 雨夜談抄』源氏物語古註釈叢刊第4巻(武蔵野書院、一九八〇)に拠る。なお、一部陽明文庫所蔵本『雨夜談抄』(国文学研究資料館の紙焼写真[288]) (以下「陽」)によって改めたところがある。
- ②高橋隆三編『実隆公記』巻一上(巻十三)『統群書類従完成会、一九五八—一九六七』。
- ③伊井春樹『雨夜談抄』と『源氏物語不審抄出』『源氏物語注釈史の研究 室町前期』(桜楓社、一九八〇)。
- ④稲賀敬二『品定め十八段区分の源流と展開—兼良・宗祇の源氏学の周辺』『国語と国文学』(一九七六・十二)。のち『源氏物語の研究—物語流通機構論』(笠間書院、一九九三)に所収。なお、氏の説のその後の発展については、稲賀敬二『品定めと帯木俊記説—『寛勝院抄』をめぐる』『源氏物語注釈史と享受史の世界』(新典社、二〇〇二)を参照された。

⑤兼良が扱った河内本系と宗祇が扱った書表紙本系との折合がつかないので、便宜上、池田亀鑑編『源氏物語大成 校異篇』第1巻(中央公論社、一九五二)の本文を掲出した。

⑥伊井春樹編『松永本 花鳥余情』源氏物語古注集成第1巻(桜楓社、一九七八)に拠る。

⑦『雨夜談抄』陽明文庫本(陽)によって改める。注①参照。

⑧小島憲之、新井栄蔵校注『古今和歌集』新日本古典文学大系第5巻(岩波書店、一九八九)に拠る。

⑨伊井春樹編『内閣文庫本 細流抄』源氏物語古注集成第7巻(桜楓社、一九八〇)に拠る。なお、一部早稲田大学図書館九曜文庫所蔵本『細流抄』(文庫30-A0328) (以下「九」)によって改めたところがある。

⑩その翻刻は紫式部学会編『源氏物語と歌物語研究と資料』古代文学論叢第9輯(武蔵野書院、一九八四)に所収。

⑪早稲田大学九曜文庫本『細流抄』(九)によって改める。注⑨参照。

⑫佐佐木信綱編『日本歌学大系』第6巻(風間書院、一九五六)に所収。

⑬子安宣邦校注『排塵小船 石上私淑言—宣長「物のあはれ」歌論』(岩波文庫、二〇〇三)。

* 討論要旨

坂本信道氏は、発表者が取り上げる『雨夜談抄』について、宗祇が特に帯木巻を重視して別に注したという意味で『宗祇別注』の異名を用いる方が、今回の発表内容を考えると本来的ではないかと指摘した。同様に、発表者による「一見宗祇源氏学の残片と見えた『雨夜談抄』」との言及は帯木巻の注の価値を認める発表趣旨から適切と言えるか、という疑義が示された。

これに対して発表者は、書名に関しては目下のところ伝本調査中であり、現段階で明確な回答するのは憚られると回答した。また、「残片と見えた」との言及に関しては、質問者の指摘する通り、帯木巻の注の価値を認めるのがまっしぐら発表の主張そのものだとして説明した。

海野圭介氏は、発表の中で取り上げられた宗祇の方法がその後どのように継承されたかのかを問題にし、発表では『雨夜談抄』と『細流抄』の共通性が指摘されていたが、むしろ差異性をクローズアップすることで発表趣旨が明確化するのではないかと示唆した。これに対して発表者は、『雨夜談抄』の継承は宗祇流の源氏物語の読みが継承されているか否かの問題として今後も詳細に検討してゆきたいと応答した。

